

## ネルヴァル，廃墟と宗教：『幻視者たち』 「クイントゥス・オークレール」

辻川，慶子  
白百合女子大学文学部：准教授

<https://doi.org/10.15017/1495147>

---

出版情報：Stella. 33, pp.195-211, 2014-12-24. 九州大学フランス語フランス文学研究会  
バージョン：  
権利関係：



## ネルヴァル、廃墟と宗教

——『幻視者たち』『クイントゥス・オークレール』——

辻 川 慶 子

ジェラルール・ド・ネルヴァル『幻視者たち』(1852)の末尾に収録された小品「クイントゥス・オークレール」は、フランス革命期に異教信仰を復活させようと試みた<sup>エクサントリック</sup>奇人を紹介する短編である。全4章からなる本作品では、序章がサン＝ドニ大聖堂をめぐる作者の省察に当てられ、残りの3章でクイントゥス・オークレールの主要著作『トラキアの秘法』(*La Thrécie*)の引用と紹介が行われている。「クイントゥス・オークレール」は従来、ネルヴァル研究でほとんど看過されてきた作品であるが、序章で展開される個人的省察は、ネルヴァルが同時代の歴史的・宗教的危機に向けた視線を理解するうえで特に注目すべきものと言えるだろう。

ここでネルヴァルはパリ郊外にあるサン＝ドニ大聖堂を訪れた際の印象を「ジャン＝ジャック・ルソーの流れを汲む夢想家たちがかつて行っていた厳粛な散策」に比して記している。そして、さらに作家はヴォルネー『廃墟』(1791)から廃墟を前にした観想というテーマを踏襲するのだが、ネルヴァルにおける歴史の夢想は、19世紀半ばという時代にあって、個人的で沈痛な響きを帯びたものとなる——

たしかに、歴史のなかには帝国の没落よりもはるかに恐るべきものがある。それは宗教の死である。あのヴォルネーでさえ、かつては神聖であった建築物の廃墟を訪れては、この感情を味わたのだった。真の信者ならこういう印象を受けずにすむのだろうが、私たちの時代の懐疑主義を心に抱きつつ、虚無へと開かれた暗い扉にこれほど多く出会う時、ともすれば身震いを覚えるのである。<sup>1)</sup>

革命から50余年を経た大聖堂を訪れる「クイントゥス・オークレール」の作者は、「虚無へと開かれた暗い扉」の前で、「宗教の死」について思いをめぐらせ

る。サン＝ドニ大聖堂内部の暗い扉は強い比喩的な意味を帯び、「かつては神聖であった建造物の廃墟」を見つめる語り手の視線は、そこに宗教の衰退をもたらした3つの時代の痕跡を読み解いていく。第1の時代は、異教の復活によってキリスト教への最初の打撃を与えたルネサンス期、第2は近代的合理性の名のもとで脱宗教化の動きをもたらした18世紀、そして第3に「現代」という宗教的懐疑と無関心の時代である。大聖堂という空間内の移動が、諸世紀の歴史を自在に行き来する時間的移動をとめない、語り手の歴史的夢想を紡ぎ出していく。本稿ではこれら3つの時代についての思索を順に追っていき、19世紀半ばにおけるネルヴァルの歴史意識の一端を明らかにしたい。

## 1. ルネサンスと異教復興の両義性

第1の時代である16世紀は、ネルヴァルにとって多くの夢想を誘う時代であった。作家の文壇登場を画する1827年の『ファウスト』第1部翻訳の後、1830年にネルヴァルは『ドイツ詩集』とともに『ロンサル〔他〕詩選集』を刊行し、ロマン主義時代における16世紀詩の復興に一役買っている<sup>2)</sup>。また、幼年時代を過ごしたヴァロワ地方はヴァロワ朝の記憶が今なお残る土地であり、ネルヴァルは主に1850年以降、この時代と土地をたえず個人的追憶や愛着とともに書き留めることになる<sup>3)</sup>。「クイントゥス・オークレール」においても、カトリーヌ・ド・メディシスとアンリ2世の墓碑の描写には、ヴァロワ朝時代が持つ魅惑とともに、ネルヴァルの数々の作品の記憶が重ね合わされている――

この3体の〈美德〉の寓意像は、たしかに3人の美の女神たちであり、これらの天使はふたりの愛の神、エロスとアンテロスだ。――自分の手で覆いをとり去った高い寝台の上に半裸体で憩っている美しい女性は、他ならぬキュテレイアではあるまいか？そして彼女のかたわらで、いっそう深い眠りにおちているかに見えるのは、シリアの秘儀を司るアドニスでは？<sup>4)</sup>

この描写には、<sup>レ・シメール</sup>『幻想詩篇』の「アンテロス」の他、『東方紀行』における3つのウェヌスについての考察の記憶が透かし見られる。作品序章「東方へ」第16節「アプルノリ」の一節を並べてみよう。旅行者はシテール島を訪れる部分で、ギリシアの3種類のウェヌス信仰を説明しているが、その「第2のウェヌス」の説明では、上に引用した「クイントゥス・オークレール」の抜粋とほぼ同じ

語彙が用いられている——

第2の神は、よりにこやかで、人間的であり、その信仰がスパルタの勝者アテナイ人たちによってもたらされた際には、信仰の是非をめぐる島住民を二分する争いとなった。彫像は驚異的な傑作としてギリシア中の評判となった。それは裸像で、右手に海の貝を持ち、息子であるエロスとアンテロスを従えている。その前には3人の美の女神たちがいて、ふたりはウエヌスを見、ひとりとは反対側を向いている。<sup>5)</sup>

ネルヴァルは「東方へ」のなかで、シリアのウエヌス信仰の3つの形態——「ウエヌス・ウラーニア、別名天上のウエヌス」、「地上のウエヌス」、「地下のウエヌス」——について説明し、特に天上のウエヌスは、「厳格で、理想的かつ神秘的な女神、アレクサンドリアの新プラトン主義者たちが、憚ることなくキリスト教徒らの聖処女に対抗することができた」<sup>6)</sup>と、この第1の信仰の重要性を強調している。オルフェウス讃歌においても祈願の対象となる天上のウエヌスは、上の引用にある第2の「民衆のないしは大地の」ウエヌスという「驚異的な傑作」を生み出した女神とは異質なものとして明白に区別されている<sup>7)</sup>。ネルヴァルが『東方紀行』においてこの点を指摘するのも、神秘的傾向を持つ異教信仰と世俗に広まった装飾的異教とを区別し、前者の意義を強調するためであった。

これを踏まえると、サン＝ドニ大聖堂におけるルネサンス期の彫像芸術が、ギリシアの「地上のウエヌス」と同じ語彙で説明されていることにも別の意味が読みとれるのではないだろうか。カトリーヌ・ド・メディシスの像にネルヴァルが見るのは、ルネサンス期の神秘主義的異教ではなく、その享楽的性格であり、それは次第にキリスト教を脅かす脅威としての姿を露わにする——

何と気高くもまた魅力的なのであろう、髪を振り乱したこの王妃は。——ウエヌスのように美しく、アルテミシアのように貞淑に、——それに、この優雅な眠りから目をさまさぬほうがよいのだ！ 彼女はまだこんなに若く、こんなに愛に満ち、こんなにも清らかだったのだから。それにしても、彼女は自分ではその気もなしに、すでに宗教に打撃を与えていたのだった、——後の聖バルテルミーの日と同じに。<sup>8)</sup>

ここで語り手は、カトリーヌ・ド・メディシスの彫像の持つ官能的な魅惑を強く感じつつも、異教の復活を称賛するのではなく、反対にそこにキリスト教、

ひいては宗教感情に対する打撃を見るのである。そのため、16世紀の芸術への愛着は次第に両義的な調子を帯びてゆく。「クイントゥス・オークレール」の語り手にとって、ルネサンス芸術は、キリスト教に代わる真の宗教的革新をもたらすことのない、精神的内実を欠いた装飾的な芸術なのであった。

サン＝ドニ大聖堂において、異教的彫像の優美さに隣り合うようにして描かれるのが、死に瀕したキリスト教芸術である——

側廊のゴシック様式のアーチの下では、メディチ家の記念碑に感嘆して見飽きることはない。——天使たち、聖者たちよ！法衣や祭服のこわばったひだに身を包まれたあなた方は、尖頭アーチに守護された下で、ルネサンスの名で飾られた華やかな異教芸術が育ち、花開くのを見て、身を震わせないのだろうか？何たること！ローマ風の丸天井、青銅のアカンサス葉飾りのついた大理石の円柱、享樂的な裸身や、正確な描線をくりひろげる浮き彫り、——それらがあなた方の足もとにあり、もはやあなた方の厳かな細長い姿には皮肉な眼差ししか向けられないだろう！してみれば、当時の預言僧が言った言葉は、何にもまさって真実であった。「猥らなウエヌスよ、私にはお前が見える、裸で神聖なる場所へ入りこみ、勝ち誇って足を祭壇にかけるのが！」<sup>9)</sup>

同じ空間内に置かれた2基の彫像が、ふたつの時代の交代を象徴的に示すものとして読み解かれる。冒頭ではルネサンス芸術の華やかな生命力に心を打たれていた語り手も、キリスト教建築内部への異教の侵食を見て恐れを隠そうとしない。そして、天使や聖者への呼びかけや預言僧の言葉の引用によって、キリスト教芸術への強い哀惜の念を示そうとする。キリスト教芸術は、メディチ家の庇護のもとに花開き勝ち誇るルネサンス芸術に抵抗する力を持たない。このため、ネルヴァルは次のように述べるのだ——

そうだ、ルネサンス芸術は、フランス革命に先立って、カトリック教会の古い教義と神聖なる厳肅さに致命的な打撃を与えたのであり、フランス革命はその残骸を一掃したのだ。<sup>10)</sup>

ネルヴァルが個人的回想やノスタルジーの次元を超えて、歴史の底流に目を留めていることに注意したい。16世紀は信仰心を次第に枯渇させたがゆえに、フランス革命の先駆けとして解釈される。ネルヴァルのこうした姿勢は、1852年にボードレールが「異教派」で痛烈に揶揄することになる詩人たちの姿勢とは一線を画していると言えるだろう<sup>11)</sup>。むしろここに見ることができるのは、1851

年という時代におけるネルヴァルの歴史意識の変容であり、特に宗教面における歴史の不可逆性に対する意識なのである。16世紀は異教復興および再生の時代であるばかりではなく、キリスト教への最初の打撃となり、宗教感情の決定的な衰退を導いた点で、18世紀とフランス革命の先駆けとしての歴史的意味を与えられるのである。

## 2. 18世紀の啓蒙思想と宗教感情の歴史

18世紀の歴史およびフランス革命は『幻視者たち』序文「叔父の蔵書」が示すとおり、この伝記作品集の中心的主題のひとつである――

18世紀の歴史は、このような注釈なしにもすますことができただろう。しかし、注意深い歴史家なら見落とすことのできないような予想外の実事が見つかるかもしれないのである。<sup>12)</sup>

1843年にアルセーヌ・ウーセが『18世紀——詩人、画家、音楽家』を刊行して以来、18世紀の肖像は同時代の流行の主題となっていた<sup>13)</sup>。ネルヴァル自身も1845年にウーセの著作の書評を書き、「18世紀はまだ終わっていない！」というジョゼフ・ド・メーストルの言葉を借用しながら、啓蒙の世紀と19世紀の連続性を問い直そうとしている<sup>14)</sup>。

「クイントゥス・オークレール」序章でも問題視されているのは、啓蒙の世紀の矛盾に満ちた姿である。18世紀はただ単に、19世紀における宗教的懐疑の直接的原因となる非宗教化だけの時代ではない。イデオログたちに代表される無神論と教条的カトリックとのあいだには、あらゆる段階の信仰が見られる、とネルヴァルは指摘する。「断固とした無神論」を表明したラ・メトリー、ドルバック、エルヴェシウス、ダランベールに対して、ブーランジェやデイドロ、ヴォルテールは「緩やかな理神論」を掲げていた<sup>15)</sup>。さらに、ルソーは「人間の魂という偉大な神秘を真剣に考え、肯定的な宗教感情を表明した […] 唯ひとりの者であった」とネルヴァルは述べている。ルソーを含め、「他の人々よりも熱狂や夢にとらえられやすい」人々は、宗教を合理性の観点から説明しようとする哲学流派とは異なり、「宗教感情」の必要性を説く点で19世紀における感情的宗教性ルリジエの問題を先取りしていたのであった。

さらに、ネルヴァルが『幻視者たち』で描こうとするのは、啓蒙の世紀の裏

側とも言えるイリュミニズムや神秘主義の系譜ではなく、むしろ個々の人物が見せる宗教感情の間欠的な現れである。ネルヴァルがカゾットを評した次の言葉は、『幻視者たち』の他の人物にも共通するものとして読むことができるだろう——

だが、誰が予想しえただろう、聖職者さえもが信仰をろくに擁護しようとしないうこの不信の世紀にあつて、純粹に寓意的な驚異への愛によって、最も真摯にして最も熱烈な神秘主義へと、徐々に導き込まれてゆくひとりの詩人に会おうとは？<sup>16)</sup>

また、ネルヴァルが「スピリチュアリスト異教的精神主義者」かつ「共産主義者」として示すレチフは、フランス革命の祭典に対しても批判的な眼差しを向け、ただひとり汎神論的夢想を綴ろうとしていた（「汎神論について、ごく少数の見神論者たちを除けば、誰がいったいそれを考えていただけろう？ ……人はおしなべて無神論者だった。ロベスピエールの催した至高存在の祭典も、彼には、哲学的刷新へと向かうごく弱々しい動きとしか思えなかった」<sup>17)</sup>）。オークレールが主張する異教信仰の復活も、「唯物主義が思想を支配していた時代に、人々の精神を宗教感情や、また、特別な信仰儀礼へと引き戻したという点で、クイントゥス・オークレールにおそらくは感謝すべきであるかもしれない」<sup>18)</sup>とネルヴァルは書いている。

懐疑と不信の時代にあるからこそ、反動として信仰への強い渴望が現れるという歴史的考察は、1845年に発表された「イシスの神殿——ボンベイの思い出」（後の『火の娘たち』『イシス』）にも共通している<sup>19)</sup>。ネルヴァルはボンベイ旅行を回想しながら、イシス信仰の儀式を描き、宗教の死についての思索を行う。2世紀におけるローマ帝国での信仰の問題は、ここでも作家の同時代の問題についての歴史的思索に導かれている——

しかし、このような全体的崩壊の状況で、人間の精神は自らのなかに生じた巨大な空虚をさらに強く感じ、神に由来する、表現できない何かを再構築する密やかな欲望を感じていた。<sup>20)</sup>

この部分がカール・オーグスト・ベッチガーの「イシスの晩課」の翻案であることはすでに指摘されている。「巨大な空虚」が信仰への希求をかき立てる契機となっているという指摘がネルヴァルの注意を引いたのだろうか。彼はさらに

ここでもヴォルネーの『廢墟』に言及しながら、18世紀および19世紀フランスにかんする歴史的分析を加えようとする――

不信仰というよりはむしろ懐疑の世紀の子である私は、全てを否定した大革命と、キリスト教の信仰をそっくりそのまま取り戻そうと主張する社会的反動との、相反するふたつの教育のあいだを揺れ動きながら、ちょうどわれわれの父の哲学者たちが一切を否定するところに導かれたように、一切を信じるところに導かれてしまうのだろうか？――私はヴォルネーの『廢墟』の壮麗な序言に思いをはせた。パルミラの廢墟の上に「過去の精」を出現させたヴォルネーは、これほどの気高い着想から、人類の宗教的伝統の全体をひとつまたひとつと破壊する力のみを選び取るのである！このようにして亡んでいったのだ、近代の理性の力の下で、かつて、より高き理性の名において天上から古き神々を一掃した最後の啓示者キリストさえもが！おお、自然よ！おお、永遠の母よ！本当にこれが、あなたの天の息子たちの最後の者のために用意されていた運命だったのだろうか？人間は一切の希望と一切の幻影とを拒絶するところまで来てしまったのか。そして、サイスの女神よ！あなたの信徒のなかで最も大胆な者は、あなたのヴェールをかかげて、「死」の像に直面してしまったのだろうか？

もしも信仰が次々と没落していったあげくが、このような結果に立ち至るのであれば、いっそ逆の行き過ぎに陥り、過去の幻想に再びとらわれようと試みるほうが、まだしも慰めになるというものではないだろうか？<sup>21)</sup>

ここには、1845年当時のネルヴァルの宗教観が凝縮されていると言えるだろう。不信と盲信のあいだで揺らぐ宗教的躊躇、神の死および諸宗教の瓦解によって生じた精神的空虚の認識、そして「過去の幻想に再びとらわれよう」とする欲望によって保たれた信仰再生への希求である。合理主義的かつ革命派のイデオログであったヴォルネーは、廢墟の観想と歴史哲学とを結びつけた著作『廢墟』のなかで、「諸宗教の欺瞞や様々な宇宙論の変遷や諸文明の衰退についての考察」を行い、最終的には過去の文明や宗教の消滅を是認したのであったが<sup>22)</sup>、ネルヴァルは反対に、古代におけるイシス信仰の儀式を描写することで、人々が信仰を必要とする渴望自体を描き上げようとする<sup>23)</sup>。

ただし、「イシスの神殿」を発表した1845年前後のネルヴァルは、演劇および演劇的再現を通して、集団的信仰の経験を復活させる可能性をいまだ捨て去っていなかった。1844年のネルヴァルはオデオン座で上演された『アンティゴネー』の劇評を書き、演劇に集団的信仰と同質の経験を見ようとしている<sup>24)</sup>。しかし、1848年後の2月革命の挫折と文学的抑圧の時代において、集団的信仰

の復活は人々の目に狂気じみた非合理的願望としか映らなくなる。「クイントゥス・オークレール」でも「イシスの神殿」と同様に異教信仰の儀式が事細かく描写されているが、革命下での異教復興は「今日では狂気に近いとしか感じられない」と作者は最後に注釈を加えている。

18世紀は、19世紀という「幻想を失った」時代の宗教的懐疑を生み出した直接の原因であるものの、様々な形で個々の宗教的熱狂が見られたことにネルヴァルはまず目を留めようとする。「過去の幻想に再びとらわれよう」とし、過去の信仰を復活させようとする試みが、18世紀の歴史のなかに通底して見られることを『幻視者たち』の諸編を通して示そうとする。しかし、「一切を否定する」という熱狂がいまだ可能であった18世紀とは異なり、ネルヴァルの同時代には、あらゆる政治的・宗教的熱狂が過ぎ去った過去の遺物となっている。ネルヴァルの眼差しは、こうした19世紀半ばの宗教的・政治的荒廃を見据えるものとなる。

### 3. フランス革命期の聖像破壊と19世紀における大聖堂修復

「秋の霧深い日にサン＝ドニを訪れるのは、ジャン＝ジャック・ルソーの流れを汲む夢想家たちがかつて行っていた厳粛な散策という、今は忘れられた輪に戻って行くことである」<sup>25)</sup> という一文から始まる「クイントゥス・オークレール」の序章は、サン＝ドニ詣でという19世紀初頭の文学的トポスに連なっている。7世紀以来の王家の墓所として、王権の宗教的権威の中心のひとつであったサン＝ドニ大聖堂は、フランス革命の際に熾烈な聖像破壊の対象となり、19世紀初頭にはその記憶も生々しい廢墟としてシャトーブリアンやコッツェブーなどの多くの訪問者を集めていた<sup>26)</sup>。聖堂がいかに熾烈な破壊を受けたかについては、シャトーブリアンの『キリスト教精髓』(1802)のための準備ノート(特に「1793年8月6, 7, 8日にサン・ドニ大聖堂で破壊された記念碑」と題された証言)に詳しい。「1793年8月6日から8日のあいだに破壊された記念碑の数は、夜に破壊を終えた段階で51にのぼる。かくして、3日間で12世紀にわたる作品が破壊されたのだ」と聖像破壊の記録を残した修道士の言葉を作家は書き写している<sup>27)</sup>。「卑劣漢をつぶせ」という啓蒙の哲学者たちの合い言葉に鼓舞された革命家たちは、人間精神の解放を願い、聖像に攻撃の矛先を向ける。こうして廢墟となった大聖堂は、シャトーブリアンの『キリスト教精髓』

によって忘れがたい姿を残すことになる——

しかし、地上からすでに消失したこれらの墓を描いてどうなるのだろうか？ これらの墓所はもう存在しないのだ！ 幼い子供たちが、強大な王者の骨を手にとって遊んだのである。サン＝ドニに人の気配はない。鳥もそこを通り過ぎるだけで、打ち砕かれた祭壇の上には雑草が生えている。大聖堂の丸天井の下には、死者を悼む賛美歌が響く代わりに、屋根をはがされた天井から滴り落ちる雨の雫、廃墟となった壁から剥がれ落ちる石の音だけが聞こえてくる。そして大時計の音が、空ろな墓や蹂躪された地下墓所に響き渡っている。<sup>28)</sup>

その後半世紀を経て、サン＝ドニを訪れたネルヴァルは「新しく修復された」大聖堂の様子を見て、歴史の不可逆性の認識を新たににする。復古王政期に修復家の手で並び直された墓碑に、ネルヴァルは一切の聖性の剥奪を見てとるのである——

サン＝ドニの打ち壊された墓や、骸骨になされた冒瀆のことなどどうでもよい！ 憎しみはそれらに敬意を払った訳だ。——今日の無関心な人間は、美術と均斉とを愛する気持ちから、それらを並べ直した、ちょうどエジプト美術館のミイラを並べるように。

それにしても、冒瀆の力には打ち勝ったとしても、むしろ無関心こそをさらに恐れずにすむような信仰があるものだろうか。<sup>29)</sup>

ここには語り手の苦々しい皮肉が十分に認められるだろう。1793年の聖像破壊者といえども、精神性を一切失った現代の宗教的無関心と比べれば恐るべき存在ではない。大聖堂の修復と墓碑のあまりに秩序だった配置は、「古い大修道院が工場や劇場になること」<sup>30)</sup>と同様、現代の宗教的無関心を露骨に曝け出している。「芸術や均斉を愛する気持ち」によって行われた修復は、聖性を顧みない点で、聖像破壊者の不敬や憎しみよりもさらに「宗教の死」をまざまざと映し出すのである。

ネルヴァルはここで非常にアクチュアルな問題に触れていることにも注意しよう。サン＝ドニ大聖堂の修復の問題は、王家の墓所のみならず革命期の聖像破壊の場——まさしく「記憶の場」——としての象徴的重要性のために、当時大きな議論を呼んでいた。1813年からは建築家ドブレが大聖堂の最初の修復を行い、1816年にはフランス記念碑博物館創設者アレクサンドル・ルノワールがサン＝ドニ大聖堂墓碑管理官に就任しているが、このふたりによる最初の修復

は、墓碑の配置の粗雑さのために多くの批判を受けていた。1847年には考古学者ギレルミーがヴィオレ＝ル＝デュックとともに大聖堂の修復の任を負うことになるが、1848年、ギレルミーは『考古学年報』に発表した論考で、ドブレの仕事が大聖堂を外部、内部ともに歪曲するものであったと強く批判している。考古学的正確さという観点からなされたこの批判は、ネルヴァルの見解と方向性を同じくしている――

しかしながら、これらの空虚な墳墓に何かしらの威厳を取り戻す手段があるとするなら、それは時間と歴史に聖別された本来の場所に注意深く再建すること以外に道はない。墳墓はおそらく冒瀆から逃れて埃をかぶっていただろう。贖罪は果たされ、恥ずべき遺体の発掘の記憶は、この贖罪の行為の前に消え去ったことだろう。[...] ただのひとつも本来の場所に置かれたものはない。地上部の教会堂に残されたものは、本来の場所から離され、時には新しく陳列されるために変更すら被っている。墓碑は、大きさや時代や番号に応じて並べられている。これらの墓碑が博物館の彫刻のように展示されるようにと、すべてに標識がつけられ、ラベルが貼られている。どの彫刻にも名前が冠されているが、しばしば誤りが見受けられ、頭部の上か、衣服のどこかにそれらが刻印されているのだ。<sup>31)</sup>

墓碑を博物館の展示のごとく陳列する大聖堂の修復には、革命期の聖像破壊に続いて、歴史の傷跡の隠蔽、さらには痕跡の破壊という新たな暴力が加えられるのであり、ネルヴァルもそれゆえに強い抵抗を覚えるのである。

宗教を合理性の観点から捉え、歴史の傷跡を覆い隠す時代にあつて、ネルヴァルは、同時代の思潮とは対極をなすように過剰な個人的感情を吐露しようとする。そして、革命者の熱情に立ち戻り、これを憧憬と悲哀が相半ばする両義性とともを描き上げるのである――

われわれの父たちのうちで、誠意と勇気をもって人間の思考の解放に献身してきた人々は、宗教そのものと、宗教の残骸とすら見える制度とを混同することをおそらくは余儀なくされたのだ。樹の幹に斧を入れると、腐った芯も、生き生きとした樹皮も、鳥や蜜蜂の隠れ場となる茂った枝々も、しつこく幹をおおう野生の葡萄の蔓も、一切が同時に断ち切られて、――すべては役立たずのいちじくのように、闇のなかへと投げ捨てられた。しかし、事物が破壊されてもその場所は残り、なおも多くの人々にとって神聖であり続ける。かつて勝ち誇っていた教会はそれを理解し、廃棄された神殿の遺跡そのものの上に、バジリカ聖堂や礼拝堂を建立したのだった。<sup>32)</sup>

革命によって破壊された信仰の場は、「生き生きとした樹皮」、「鳥や蜜蜂の隠れ場となる茂った枝々」、「しつこく幹をおおう野生の葡萄の蔓」などの生命力を帯びた比喻で示されており、こうして「断ち切られ」、「闇のなかに投げ捨てられた」キリスト教が個人的な強い愛着とともに描かれる。しかしネルヴァルは同時に、父の世代が共有していた宗教的とも言える情熱にも憧憬の念を禁じえない。革命家の盲目的な情熱（「誠実さ」と「勇氣」）に、彼は同時代には失われてしまった宗教的高揚を認めるのである。19世紀という精神性枯渇の時代にあって、作家は父祖以来のキリスト教の伝統と、その対極にも思える革命者の宗教的熱情の双方に——何の矛盾もなく——同じく哀惜の念を向けるのである。

この文脈においてこそ、ネルヴァルの次の言葉は理解する必要がある——

近代のある哲学者が述べているように、キリスト教はあとせいぜい1世紀そこそこしか生き続けられないというのが本当だとしたら、——神秘の樹から解き放たれたキリストの血まみれの足へ、聖母マリアの無垢の衣へ、涙をたれ、祈りを口にしつつ、とりすがるべきではないのだろうか。——それは、天と地の古き結合の至高の表現——涙をうかべて飛び去っていく聖霊の最後のくちづけなのだ！<sup>33)</sup>

信仰なき地上から逃れ去った神へと向けられる哀惜の念は、ネルヴァルにおいて新規なものではない<sup>34)</sup>。ここにはネルヴァルのキリスト教への回帰を見るよりも、さらに根源的な宗教感情の枯渇への恐れを見るべきではないだろうか。信仰の持つ根源的な非合理性を完全に捨象しようとする、同時代の宗教的懷疑に抵抗するために、ネルヴァルは感情的であり、ほとんど狂気じみた信仰への希求を表明しようとする。「最後の啓示者」たるキリストの像を前にして、「天と地の古き結合」を思い起こそうとする語り手は、信仰の復活を狂気じみたものとしか捉えない近代という時代を明晰に見据えようとする。

## 結論にかえて

「天と地の古き結合」を再び取り戻したいと願う渴望は、この作品を越えてさらに『オーレリア』における狂気の幻覚に直接に繋がる主題である。特に『オーレリア』第2部において、信仰を求める叫びはさらに痛切な響きを帯び、語り手は、時に自らの生涯をさかのぼり、時に汎神論、神秘主義、キリスト教など諸宗教を経巡りながら、宗教的懷疑と信仰への希求の双方に引き裂かれた狂気

の夢想を書き留めていく。「天と地の古き結合」が切断されたという思いは高じ、サン＝ドニ大聖堂の「虚無へと開かれた暗い扉」は、『オーレリア』においてコンコルド広場を横切る「黒い太陽」へと転じる――

なにもない天空に黒い太陽が見え、チュイルリー公園の上に血の真っ赤な色をした球体が見えるような気がした。[...] 風ですばやく流されてゆく雲を透かして、いくつもの月が猛烈な早さで通り過ぎてゆくのが見えた。地球が軌道を外れて、マストを失った船のように天空をさまよい、大きくなったり小さくなったりしている星々に近付き、あるいは遠ざかっているのだと思った。<sup>35)</sup>

同時代の多くの政治・社会・宗教思想において、「宇宙の調和」という理論が社会の共生を象徴的に示す主要概念として機能していた<sup>36)</sup>。これは個人と社会を結ぶ社会的絆、地上と宇宙とを結ぶ絆、生者と死者とを結ぶ絆を総合的に示す宇宙的ヴィジョンであるが、そうした思想的背景を思い起こすと、この狂気の幻想も、一切の絆を失い、精神的にも歴史的にも「軌道を外れ」、方向を見失った19世紀社会を暗示していると見ることができるだろう。

\*

これまでネルヴァル作品は、個人的回想や個人神話との関わりのなかで理解されることが多く、同時代の歴史・宗教的思潮との関わりは十分に検討されてこなかった。しかし、『幻視者たち』の諸編、なかでも「クイントゥス・オークレー」の序章には、ネルヴァルの透徹した歴史意識が垣間見られると言えるだろう。サン＝ドニ大聖堂という記憶の場をめくりながら、ネルヴァルは諸世紀の歴史を振り返り、諸宗教の死や宗教的懐疑についての批判的考察を行う。そして、この考察は――サン＝ドニ大聖堂の修復についての議論と同様――同時代の歴史的状況に根差したものであり、ネルヴァルの作品がいかに当時の社会的・宗教的思潮と強く交差しているかを示している。同作品のメランコリックな語りが描き出すのは、信仰の復活を願いながらも、しかし信仰の枯渇を見据える明晰な時代意識である。ボードレーもまた「異教派」のなかで同様の宗教的荒廃の意識を表明している――

いずれまた、絶望した者の叫びに強いられたかのように、宗教と哲学が戻って来るがいい！<sup>37)</sup>

また、「クイントゥス・オークレール」の銘句として引用されている次のヴォルテールの言葉は、軽やかなユーモアとも悲痛な憂愁ともとれる言葉であるが、そこには近代における信仰や狂気を軽やかに自嘲するネルヴァル作品の特質を見ることができるだろう——

——私はもうマニ教徒はいないものと思っていましたよ、とカンディッドが言った。

——私がいいますよ、とマルタンが言った。 ヴォルテール<sup>38)</sup>

あらゆる社会的、宗教的革新の夢が挫折し、新たな地平もみえない第2帝政初期において、ネルヴァルは宗教感情の歴史を辿りながら、時代の精神的亀裂を浮き彫りにしようとする。「クイントゥス・オークレール」序章の考察は、ただオークレールという人物のみに関わるものではなく、1850年代という世紀の転換点、とりわけ『幻視者たち』全編を通して示されるネルヴァルの歴史意識を解く鍵として読むことができるのではないだろうか。

## 註

- 1) Gérard de NERVAL, « Quintus Aucler » [abréviation : QA], *Les Illuminés, Œuvres complètes*, éd. Jean GUILLAUME et Claude PICHOS, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade » [abréviation : NPI], 1984, t. II, p. 1135. なお、日本語訳は『ネルヴァル全集』（筑摩書房、1997-2003年、全6巻）を参照しつつ、一部改訳した。
- 2) 1828年のアカデミー・フランセーズ懸賞論文「16世紀初頭から1610年までのフランス文学における進展と進歩について」を機に、この時期には16世紀にかんする刊行物が相次いでいた。ネルヴァルはサント＝ブーヴが1827年から1828年に『グロープ』誌に発表していた『16世紀フランス詩および演劇概観』および『ロンサール作品選集』を参照し、また18世紀末に刊行されていたフランス詩選集『アナル・ポエティック』（Claude SIXTE SAUTEREAU DE MARSY et Charles IMBERT, *Annales poétiques ou Almanach des Muses, depuis l'origine de la Poésie Française*, Paris : Delalain, 1778-1789, 40 vol.）を参照・転写しながら、『ロンサール〔他〕詩選集』を編纂している。Voir l'Introduction d'Emmanuel BURON et de Jean-Nicolas ILLOUZ au *Choix des poésies de Ronsard, Du Bellay, Baif, Belleau, Du Bartas*,

- Chassignet, Desportes, Régnier*, Paris : Classiques Garnier, 2011, pp. 25-66.
- 3) 『火の娘たち』(1854)「アンジェリック」(初出『塩密輸入たち』(1850))のなかで、作者はこの地方がヴァロワ朝の君主に対して抱いていた愛着を説明するために、自らの祖母の言葉を次のように回想している——「マルグリット・ド・ヴァロワやメデイチ家の人々の古い采地——彼らはそこで善政を施した——の一部をなしていたこの地方では、彼らにとって代った一族に対する体質的な憎悪がつもりにつもっていた。私は何度聞いたことだったか、——私の祖母が、伝え聞いていた話を物語ってくれたあとで、アンリ2世の配偶者について「あの偉大なカトリーヌ・ド・メディス様……お子様方がお気の毒に、殺されなされて！」と口にするのを」(*Les Faux Saulniers*, *NPI*, t. II, p. 73 ; « Angélique », *NPI*, t. III, pp. 503-504)。
- 4) *QA*, p. 1137.
- 5) *Voyage en Orient*, *NPI*, t. II, p. 244.
- 6) *Ibid.*, p. 247.
- 7) ネルヴァルと同時期に刊行されているギリシア詩選集(オルフェウス讃歌も含まれている)の序文でも次の説明が見られる——「異教にはふたつの宗教が見出される。一方は秘密に守られ、形態の下に隠された思想を露わにするもので、エレウシスの非常に意義深い秘儀やデルフォイの賢明な神託によってその教説が教示される。もう一方は、一般に広まった俗悪な宗教であり、悪徳と美徳、人間の性格すべてを神格化したもので、ここでオリンポスを満たす神々は、情熱に身を燃やし、短気で、弱く、恋に身を焼き、時に賢明さを備えるという姿を見せ、天空は地上の形象の忠実な反映となる」(*Lyriques grecs, Orphée, Anacréon, Sappho, [...]*, Paris : Le-fèvre, Charpentier, 1842, p. 6)。なお、ウエヌス信仰が3つの信仰の形を取るという見解は、ギニオーによるクロイツァー翻案の著作を踏襲したものであることがすでに指摘されている——J. D. GUIGNIAUT, *Religions de l'Antiquité, considérées principalement dans leurs formes symboliques et mythologiques*, ouvrage traduit de l'allemand du D<sup>r</sup> Frédéric CREUZER, Paris : Treuttel et Würtz, 1834, t. II, II<sup>e</sup> partie, p. 655 (なお、この著作では4つのウエヌスも言及されている)。さらにこの著作では、ウエヌスの図像に登場するエロスやアンテロス、3美神についての説明も見られる——「アフロディテはしばしば、ヘルメスまたはジュピターとのあいだに生まれた息子である〈愛の神〉エロスを伴っている。そしてマルスとの関係から生まれたアンテロスは、兄の不正の報復をしようと恋人たちに帰還を命じる」(665頁)。「美の女神たちは神聖なヴェールを〔ウエヌスへと〕掲げる。これらの女神はもともと〈時の女神〉(〈季節〉)と強い関係があり、後に〔…〕特にウエヌスに結びつけられるようになった」(666頁)。
- 8) *QA*, p. 1137.
- 9) *Ibid.*, pp. 1136-1137.
- 10) *Ibid.*, p. 1137.
- 11) BAUDELAIRE, *L'École païenne, Semaine théâtrale* du 22 janvier 1852 ; *Œuvres*

- complètes*, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1976, t. II, pp. 44-49.
- 12) « La Bibliothèque de mon oncle », *NPL*, t. II, p. 886.
- 13) Voir Roland MORTIER, « Arsène Houssaye et la redécouverte du XVIII<sup>e</sup> siècle français », *Études sur le XVIII<sup>e</sup> siècle. Retour au XVIII<sup>e</sup> siècle*, n° XXII, Bruxelles : Éditions de l'Université de Bruxelles, 1994, pp. 21-27 ; Catherine THOMAS, *Le Mythe du XVIII<sup>e</sup> siècle au XIX<sup>e</sup> siècle (1830-1860)*, Paris : Honoré Champion, 2003. なお、ウーセの18世紀の肖像は、1890-1891年には12版を重ねている。
- 14) « *Portraits du dix-huitième siècle* par M. Arsène Houssaye », *Le Constitutionnel*, 28 janvier 1845 ; *NPL*, t. I, pp. 897-900. なお、ネルヴァルが参照したのは次の版である—— Arsène HOUSSAYE, *Galerie de portraits. Le Dix-huitième siècle ; les poètes et les philosophes ; la cour et le théâtre ; la peinture*, nouvelle éd., Paris : Charpentier, 1845. ジョゼフ・ド・メーストルの言葉は、ジャン・リシェが指摘するとおり、『サントペテルブルグ夜話』第11の対話における次の文章に依拠している—— « Celui-là [l'homme de génie] sera fameux, et mettra fin au XVIII<sup>e</sup> siècle qui dure toujours ; car les siècles intellectuels ne se règlent pas sur le calendrier comme les siècles proprement dits. » (Joseph de MAISTRE, *Les Soirées de Saint-Petersbourg, ou Entretiens sur le gouvernement temporel de la Providence*, Paris : Librairie grecque, latine et française, 1821, t. II, pp. 317-318).
- 15) *QA*, p. 1135. なお、「緩やかな理神論」という言葉は『幻視者たち』序文「叔父の蔵書」に登場する「叔父」の信仰を示す表現と同一である (*NPL*, t. II, p. 885).
- 16) « Jacques Cazotte », *NPL*, t. II, p. 1083.
- 17) *QA*, p. 1070 ; p. 1067.
- 18) *QA*, p. 1158.
- 19) なお、この作品は大幅な修正を経て、1854年に『火の娘たち』に「イシス」として再録される。1845年11-12月号の『ファランジュ』誌に掲載された「イシスの神殿」については以下を参照—— *Temple d'Isis. Souvenir de Pompéi*, éd. Hisashi MIZUNO, Tusson : Du Lérot, 1997.
- 20) *Temple d'Isis*, pp. 62-63. この文章は『火の娘たち』「イシス」では削除されている。Voir « Antiquités Égyptiennes. Les Vêpres d'Isis, d'après un Tableau d'Herculanum ; traduites de l'allemand de M. Boettiger, Conseiller aulique, et Directeur des Pages de sa Majesté le Roi de Saxe ; par J. D. Bader », *Le Magasin encyclopédique, ou Journal des sciences, des lettres et des arts*, avril 1810, t. II, pp. 241-278. Voir le *Temple d'Isis*.
- 21) *Le Temple d'Isis*, pp. 81-82 ; « Isis », *NPL*, t. III, p. 619.
- 22) Roland MORTIER, *La Poétique des ruines en France. Ses origines, ses variations de la Renaissance à Victor Hugo*, Genève : Droz, 1974, p. 140 ; Constantin-François VOLNEY, *Les Ruines*, présentation de Jean TULARD, Paris-Genève : Slatkine, 1979.

- 23) Voir Jean-Nicolas ILLOUZ, «La religion de Nerval», in *Savoirs en récits II. Éclats de savoirs : Balzac, Nerval, Flaubert, Verne, les Goncourt*, éd. Jacques NEEFS, Paris : PUV, 2010, pp. 49-69.
- 24) «Odéon, “Antigone”», *L'Artiste*, 12 mai 1844 ; *NPl*, t. I, pp. 801-803. 「『アンティゴネー』の上演はほとんど古代におけるのと同様に宗教的性格を持つものであった。劇場ではなく、神殿が開かれるかのようにであった」とネルヴァルは熱狂を隠さずに述べている。
- 25) *QA*, p. 1135.
- 26) この点については、次の著作に集められた証言を参照—— *Saint-Denis de 1760 à nos jours*, présenté par Jean-Michel LENIAUD, Paris : Gallimard / Julliard, «Collection Archives», 1996 ; CHATEAUBRIAND, *Génie du christianisme* [1802], *Essai sur les révolutions. Génie du christianisme*, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1978 ; August von KOTZEBUE, *Souvenirs de Paris en 1804*, traduit de l'allemand sur la deuxième édition [par Guilbert de PIXÉRÉCOURT], 2 vol., Paris : Barba, 1805.
- 27) CHATEAUBRIAND, *Génie du christianisme, op. cit.*, p. 1198.
- 28) *Ibid.*, p. 939.
- 29) *QA*, p. 1136.
- 30) *Idem.*
- 31) François Baron de GUILHERMY, *Monographie de l'église royale de Saint-Denis, Tombeaux et Figures historiques*, dessins par Ch. FICHOT, Paris : Librairie archéologique de Vor Didron, 1848, p. 106. なお、建設省の命を受けたギレルミーとヴァイオレ＝ル＝デュックが実際に修復工事を開始したのは1860年以降のことであった。詳細については以下の著作を参照—— *Saint-Denis de 1760 à nos jours*, pp. 171-195 ; Alain ERLANDE-BRANDENBURG, «Saint-Denis : projet d'achèvement de la façade de l'ancienne abbatale Saint-Denis», in *Viollet-le-Duc, catalogue de l'exposition au Grand Palais en 1980*, Paris : Éditions de la Réunion des musées nationaux, 1980, pp. 184-185.
- 32) *QA*, p. 1138. なお、強調は筆者による。
- 33) *Ibid.*, p. 1137. この「近代のある哲学者」が誰を指すのか、現時点では確認できていない。
- 34) 例えば、イギリス領でセリゴ島と呼ばれるシテール島を前に、ネルヴァルは次のように書いている——「わが夢はここまで……そしてここからが目覚めだ！空も海も昔と変わらない。オリエントの空とイオニアの海は毎朝聖なる愛のくちづけを交わしている。だが大地は死んだ、人間の手にかかって死んだのだ。そして神々は飛び去ってしまった！」(*Voyage en Orient*, *NPl*, t. II, p. 234)。
- 35) *Aurélia*, *NPl*, t. III, p. 734.
- 36) この点にかんしては、拙論「フランス革命の断絶に抗して——ネルヴァル『幻視者

たち』「カリオストロ」における政治と宗教, 『フランス語フランス文学研究』第95号, 日本フランス語フランス文学会, 2009年9月, 155-167頁を参照されたい。

37) BAUDELAIRE, *L'École païenne*, *op. cit.*, p. 48.

38) *QA*, p. 1135. なお, この一節は『カンディード』の忠実な引用ではない。